



国立音楽院認定 管楽器リペア技術師

主催団体 国立音楽院

受験資格 国立音楽院の所定コースを学び、カリキュラムを修了すると資格が取得できる

目安となる取得期間 1年～2年

ニュース
&
TOPICS

サクソやフルートをはじめ、管楽器の調整や修理を行うプロとしてのスキルを証明する資格。デリケートで奥深い管楽器の修理には専門スキルが求められるため、音楽愛好家を陰で支える貴重な技術者として活躍することができる。独立して、工房をオープンすることも可能。今では全国的にニーズがあり、自分次第で活動の場を広げていくことができる。

管楽器の調整・修理といった特殊技術が身につき、 たくさんの音楽愛好家をサポートできる資格。 縁の下の力持ちとして音楽業界に一生携われます

どう学ぶ？

**実技中心のカリキュラムで
高いリペア技術をマスター**

国立音楽院の管楽器リペア科で学ぶ。管楽器の構造や工具などの知識を習得し、同時に実践を通じてスキルを身につける。管楽器リペアに関する授業のほか、楽器演奏の実技レッスンも受けられる。2年本科のほか、1年コースもあり。

どう稼ぐ？

**メーカーや楽器店への就職、
工房を開いて独立などさまざま**

資格取得後は、楽器メーカーや楽器店、音楽工房などで活躍することができる。管楽器リペア工房を立ち上げるなど、独立開業をめざすこともできる。個人の修理依頼に対応するほか、中学校や高校と連携して吹奏楽部をサポートする場合も。



高橋 真さん (35歳)

高校卒業後、国立音楽院の管楽器リペア科へ。資格を取得してからさらに2年間学校で腕を磨き、23歳で「ヤマハミュージックストア荒井」に就職。

**吹奏楽部時代に、
管楽器の造形美や
メカニズムに惹かれた**

高橋さんが管楽器リペアの世界へ興味をもったのは、高校時代だった。「吹奏楽部に入っていたのですが、楽器の造形美やメカニズムに惹かれてこの道をめざすことにしました」高校卒業後、国立音楽院に進学。同級生は、吹奏楽部出身者がほとんど

だった。大学を出てからこの道をめざした人や、社会人になってから学び直したいと入学してきた人も多かったという。そんな仲間たちと切磋琢磨し、2年後に資格を取得。高橋さんはその後、研究科に進み、さらに講師の助手として、資格取得後も学校に残って2年間腕を磨いた。「資格を取ったことで、『この道を究めてみせる!』という気持ちになりました。そのため、現場に出る前にもっと高いスキルを身につけてお

きたいと思っただけです」

**リペアを通して、
自分らしさを表現できる。
だから、おもしろい**

管楽器のへこみを直す作業では、専用道具の「芯金」を内部へ差し込み、へこんだ部分を擦っていく。管楽器の音色を左右する部品、タンポ、の交換時など、火を使う機会も多いという。「この仕事に失敗は許されません。

「この道を究めてみせる!」と、
資格取得で自分の軸がより明確に。
知れば知るほど奥が深い世界なので、
ますますこの仕事が好きになっていきます。

『孫に譲ろうと思って』と持ち込まれる方もいるほど、一つひとつの楽器にはお客様の想いが込められている。楽器の数だけ、ドラマがあるのです。ですから作業中は、片時も気を抜くことはできません」
「相当に神経を使う仕事だが、リペア後の楽器と対面したお客様の顔を見ると、疲れは吹き飛んでしまうそう。」「私の原動力は、お客様の喜ぶ顔。」「音楽を愛する方々を陰から支えている」と実感しながら働けるのが、この仕事の醍醐味なんです」
造形美の虜になっただけあって、リペアでは「美」にこだわっている高橋さん。たとえばいくつも並ぶ「タンポ」の厚みをミリ単位でそろえると、管楽器はより美しく見えるという。「音楽家は、演奏を通じて自分らしさを表現しています。方向性はまったく異なりますが、実は私たちも同じ。リペアを通じて、自分らしさを表現しているのです」



木製ハンマーは、へこみを直すために使用。繊細な楽器を扱うだけに、メーカーや楽器によって約20種類を使い分けているという。楽器に適したハンマーがない場合は、自ら製作することもある。